



第4回

モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2009年5月10日(日)

◆ 開演 ◆ 14:30 ◆

会場：ザ・ハーモニーホール
＜小ホール＞
(松本市音楽文化ホール)

主催：モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

共催：長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・松本交響楽団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あづみの音楽祭

後援：松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会

信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団



よこしまかつと

前回までモーツァルトの生い立ちをこの全曲演奏会では追いかけてきましたが、今回はモーツァルトが生前愛し、活躍したプラハでのモーツァルトに焦点を当てて彼の魅力に迫りたいと思います。

モーツァルトのプラハ訪問

モーツァルトのプラハ市民との関係は、晩年の悲しいストーリーにおける幸福な一ページであった。ウィーンがモーツァルトとその音楽に対して冷淡になっていくように見えた頃、プラハはどちらにも惜しみない愛を注いでいた。《フィガロの結婚》の上演を監督するためプラハを訪れたモーツァルトは大きな成功を収め、プラハのためのオペラを作曲することを委託されたが、結局これが《ドン・ジョバンニ》となった。最後のオペラ《皇帝ティートの慈悲》もボヘミアのこの首都のために作曲されたものである。プラハの教師フランツ・ニーメチェクは、モーツァルトの死後、息子カールの教育を託された人物であるが、彼は《プラハ》シンフォニーの初演の模様や、モーツァルトとプラハのオーケストラの関係に関する証言を残している。これらの記録は実際の出来事から10年後に書かれたもので、確かに理想化されてはいるが、詳細はともかく、大筋においては確かなものである。

『私は「《後宮からの誘拐》が」プラハで上演された時に、識者も素人をも巻き込んだ熱狂ぶりの有様は目撃している。それは、あたかも今まで当地で聴かれ、知られていたものが音楽ではなかったかのようなようであった。すべての人々がこの新しいハーモニーに、独創的で今まで耳にしたことがないような管楽器の処理に驚嘆した。やがてボヘミア人たちは彼の作品を求めはじめ、早くもその年【一七八二年】には、モーツァルトのクラヴィア作品や交響曲が、ほとんどすべての比較的よい音楽会で聴けるようになった。この時以来、ボヘミア人たちのモーツァルトびいきは決定的なものとなった。わが故郷プラハの最も優れた識者や芸術家たちは、モーツァルトの最高の賛美者であり、彼の名声を熱心に広めたのである。…略…

「フィガロの結婚」は一七八七年にボンディーニ劇団によってプラハの劇場で上演され、初日からただちに喝采を得た。…略… このオペラが引き起こした聴衆の感動は、前代未聞のものであり、人々は聴きあきることを知らなかった。…略… フィガロの歌はまたたく間に路地や庭にこだまし、居酒屋のハーブ奏者ですら、自分の演奏を聞いてほしいと思うときには〈もう飛ぶまいぞ〉を弾きさえすればよかった。もちろん、この現象は大部分、作品のすばらしさそのものによっている。しかし、音楽の真の美しさに対する感性を身につけた聴衆、音楽に精通した識者のいる聴衆は、そのような芸術の価値を即座に感じるとることができたのである。』

モーツァルトと3本のオペラを共作したイタリア人の台本作家ロレンツォ・ダ・ポンテも、「フィガロ」がプラハで受けている様子を見て驚いている。「ボヘミアの人たちがその音楽に熱狂する様子を描写するのは容易ではない。ほかの土地ではほとんどもてはやされることのない音楽でも、ここの人たちにとっては”神の”作品なのだ。彼の音楽のもっとも美しいところを、ボヘミア人は一回聴いただけで完全に理解してしまう」。

プラハの新聞批評も特に《フィガロの結婚》の与えたインパクトの大きさを裏書きし、プラハ公演のすばらしさを強調してる。1786年12月12日付の州郵便局時報という新聞にはこう書かれている。

「ほかのいかなる音楽も(と当地のひとはいう)《フィガロの結婚》というイタリア・オペラ以上のセンセーションを巻き起こしたものはない。すでに当地では何回か上演されているが、拍手は際限もなく続く。このオペラをウィーンで観た愛好家たちは当地の舞台の方がずっといいとほめている。わが偉大なるモーツァルトもちろんそのことは耳にしたであろう。というのは、彼がじきにこの上演を観に当地にやってくるという噂が流れているからである」。

モーツァルトは1787年のカーニバルのシーズンの間にイギリスへ行くつもりでいたが、その案は延期された。その代わりに、プラハからのニュース(上記に書かれた様子)を聞くとすぐに行動を起こし、年が明けると最初の週のうちにプラハに向けて旅立った。1787年1月11日にプラハに着いたモーツァルト一行。その夜訪れた舞踏会でモーツァルト自身が見たものは”フィガロ・フィーバー”というものだった。

彼は「私は嬉しくて、じっとしていましたが、その間、人々はすべて私の《フィガロ》の中の音楽をコントロールダンスやドイツ・ダンスに編曲して飛び回るのはです。ここでは、人は《フィガロ》のこと以外は話しません。人々が演奏するのも、歌うのも、口笛で吹くのも《フィガロ》ばかりです。明けても暮れても《フィガロ》、《フィガロ》。私にとっては大変な名誉です」と親友のジャカンに書いている。そしてこれからの予定もこのように伝えている。「・・・では、さようなら。こんどの金曜、十九日にぼくの音楽会(この時プラハ・シンフォニーが初演される)が劇場で催されることになった。おそらく二回目も開かざるをえないだろう。そのために、ぼくの当地での滞在が残念ながら延びそうだ。・・・略・・・」。

モーツァルトのプラハへの旅について、そのプラハから親友のゴットフリート・フォン・ジャカンに宛てた手紙が、この旅行での唯一のオリジナルな記録となっている。

1月19日にモーツァルトの主要な資金源となる音楽会が国民劇場で開かれ、二長調のシンフォニー”プラハ”KV504が演奏され、彼自身も3曲の即興演奏を行なったが、その最後の曲は《フィガロの結婚》の中の「もう飛ぶまいぞ」をテーマにした変奏であった。客席にいたニーメチェクの伝記にはこう書かれている。「実際私たちはどちらを讃えるべきかよくわからなかった。彼の抜群の音楽なのか、それとも彼の抜群の演奏なのか。両者が相重なって圧倒的な感動を与えるので、私たちはまるで魔法にかかったようだった。コンサートが終わっても、モーツァルトはひとりでピアノに向かい、三十分の間即興演奏を続けていた」。それらを総合して、「モーツァルトにとってこの日は彼の生涯でもっとも幸せな日だった」と彼は回想する。

モーツァルトがプラハを去ったのは2月8日で4日後にウィーンに帰着したものと考えられている。このプラハ滞在期間中に、モーツァルトは興行師パスクワレ・ボンディーニから次のシーズン用のオペラを1曲作曲するよう依頼されている。

プラハにはザルツブルグ以来の旧知ドゥーシェク一家やトウン伯爵がいた。新しくオペラを書く依頼を受け、来るべき秋にふたたびプラハを訪れるという希望ができたのは、おそらく、これら有力者の尽力によるものであっただろう。2月にウィーンに帰った直後、彼はダ・ポンテに台本を頼んでいる。この陽気な自称僧院長(ダ・ポンテ)は、そのときサリエリとマルタン・イ・ソレルのための台本を執筆中だったが、即座に引き受けて、題材としてドン・ファンはどうだろうと提案した。この冒険好きの男はドン・ファンに自然な共感を抱いていたのかもしれない。こうして『ドン・ジョバンニ』を作曲しはじめたとき、当年31歳のモーツァルトは、まさにその創作活動の最終段階に足を踏み入れるのである。

PROGRAM NOTE

- 交響曲 二長調 Sinfonie in D dur KV504
(30歳 1786年12月6日 ウィーンで作曲)
Adagio-Allegro, Andante, Presto

1786年12月に入って『自作全曲作品目録』には2曲の大作が記入される。

「〔1786年〕一二月四日 クラヴィーア協奏曲。伴奏。〔KV503〕・〔1786年〕一二月六日 交響曲〔KV504〕。」

モーツァルトはKV504を予定されているプラハ訪問のためばかりではなく、1786年12月にウィーンのトラットナー・カジノで開かれたと思われる、4回にわたる待降節の予約コンサート・シリーズをも念頭において作曲した可能性がある。

【シンフォニーとメヌエツト楽章】

ドイツ語圏では、KV504はしばしば「メヌエツトなしのシンフォニー」と呼ばれている。この名称は遡及的(そきゅうてき)な観点から生じたものである。なぜなら、18世紀に作曲された何千曲ものシンフォニーは(モーツァルトの多くのシンフォニーも含めて)3楽章形式であるにもかかわらず、19世紀と20世紀初めに演奏されたほとんどの古典的シンフォニー(モーツァルトの後期6大シンフォニー、ハイドンの12曲の《ロンドン》シンフォニー、ベートーヴェンとシューベルトのすべてのシンフォニー)はKV504を除いて4楽章形式だからである。もしKV504がメヌエツトないスケルツォを欠いた唯一の有名な古典的シンフォニーだとするならば、この曲をめぐって、何か特別な事情があるに違いないと考えられてきた。モーツァルトはKV425(第36番、リンツ・シンフォニー)、KV444(第37番、序奏のみモーツァルト作曲、次回第5回全曲演奏会で演奏予定)を書き終えた後、このKV504のシンフォニーを書くまでにおよそ3年以上待っている。そして次に書かれたこのシンフォニーは明らかに《イタリア風シンフォニア》への復帰などではなく、一つの偉大な《ウィーン＝シンフォニー》であり、言うべきことが3楽章ですべて言い尽くされているので、モーツァルトはメヌエツトを書かなかった(必要なかった?)と一般的に考えられるようになった。ただシンフォニーにおけるメヌエツトについては今までも多くの論争が起こった。シンフォニーにおいてメヌエツトとトリオは任意のものであるばかりでなく、美的な観点からすれば忌まわしい存在だと考える多くの学者がいることも確かである。

【プラハのオーケストラ】

プラハのオーケストラは18世紀の標準からしてさえ小さいものだったが、ニーメチェクの聖徒伝めいた説明や、モーツァルトがこのアンサンブルを念頭に置いて作曲した作品のオーケストレーションから、きわめてよく訓練されたグループであったことがわかる。1780年頃、アーダンベルト・ギロヴェッツ(彼の自伝の中でモーツァルトを1785年に訪ねたことが書かれている)はプラハを訪ね、「俳優と同様オーケストラに関しても、その当時の〔ボヘミア〕国立劇場は非常に水準が高かった。……劇場オーケストラは秀逸だった」と報告している。1787年と1796年の記録によると、プラハのオーケストラは弦楽器パートが第一ヴァイオリン3、4人、第二ヴァイオリン3、4人、ヴィオラ2人、チェロ1、2人、コントラバス2人、管楽器パートは各1人、チェンバロ1人で編成されていた。

- 交響曲 ト長調 Sinfonie in G dur KV110〔75b〕
 (15歳 1771年7月 ザルツブルグで作曲)
 Allegro, *Andante, Menuetto, Allegro

この作品の自筆譜の冒頭に、ヴォルフガングは次のように見出しを書き入れている。「シンフォニア/ザルツブルグの騎士ヴォルフガング・アマデーオ・モーツァルト作/一七七一年七月」。この「騎士」という称号は1770年7月、ローマにおいて教皇が14歳の神童に授けた黄金拍車勲章、あるいは黄金の騎士の勲位を指している。1769年12月からの足かけ3年にもわたる長い第1次イタリア旅行。ザルツブルグに帰ってきたモーツァルト父子はしばらくの間家庭で落ち着いた生活を続けるのであった。それは真夏の8月13日まで、ちょうど4ヶ月半の期間である。このシンフォニーはこの年の夏のザルツブルグでのコンサートおよび第二次イタリア旅行(すでに計画はされていた)中のコンサートのために作られたことは確実であろう。

*モーツァルトは2楽章の速度表示を書いていない。

- 交響曲 変ホ長調 Sinfonie in Es dur KV184〔161a〕
 (17歳 1773年3月30日 ザルツブルグで作曲)
 Molto Presto, Andante, Allegro

1773年3月13日、ようやく第3次イタリア旅行からザルツブルグに帰ったモーツァルト父子にとって、またモーツァルト一家にとって、また平穏な日々がおとずれた。しかしそれは記録資料に乏しい時期のひとつでもあった。この時期のモーツァルト一家の消息をわずかしか伝えてくれないという結果を生んでいる。この時期の消息を伝える唯一の資料といえるのは、ほかならぬモーツァルト自身の作品である。このザルツブルグ期にはデイヴェルティメントKV166、KV205や教会音楽、そして今回演奏する交響曲KV184を含む4曲の交響曲である。7月14日、レーオポルト父子はまた妻と娘とをザルツブルグに残したまま、ウィーンへと旅立ってしまう。モーツァルト父子がザルツブルグに留まっていたのは3月なかばから7月なかばにかけてのわずか4ヶ月であった。

- ファゴット協奏曲 変ロ長調 Konzert in B dur für Fagott und Orchestra KV191〔186e〕
 (18歳 1774年6月4日 ザルツブルグで作曲)
 Allegro, Andante ma adagio, Rondo (Tempo di Menuetto)

モーツァルトは二長調のピアノソナタKV284を献呈したターデーウス・フォン・デュルニツ男爵のために、3曲のファゴット協奏曲と1曲のファゴット・ソナタを作曲したといわれている。だが今のところ、デュルニツのための協奏曲は発見されておらず、このKV191はその3曲には含まれていないと考えられている。

- 参考文献 「モーツァルト」メーナード・ソロモン著、「モーツァルト書簡全集」白水社、「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著
 「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著、「モーツァルトの世界」スタンリー・サディー著、「モーツァルト」アルフレート・アインシュタイン著